

会報

2022年4月30日

編集発行
日本家庭教育学会
会長 中田 雅敏

第109号

THE HOME EDUCATION SOCIETY OF JAPAN



家庭とルーツ

筑波大学教授 明石 純一

2021年の流行語大賞に「親ガチャ」という言葉がノミネートされました。親、ひいては家庭環境を選べない自らの定めを嘆く子どもが発する、穏やかならぬ響きを持つ言葉です。家庭というものの先天的性質を子どもが自虐的に語るインターネットスラングで、2000年代に問題視された「希望格差」をシニカルに引き受ける、現代的な家庭観のひとつともいえます。

ちなみにわたし自身の家庭観からは、家庭に結節する多様なルーツ（Roots）が切り離せません。それは自身の専門に由来します。日本では馴染みがない「移民研究」という学術分野がわたしの専門で、本学会的にいえば、移民の家庭教育は関心事のひとつです。例えば、国際結婚が形成する家庭で、「ハーフ」や「ダブル」と呼ばれる子供はどんな教育方針に沿って育てられているのでしょうか。父母どちらの文化や言語の習得が優先され、その選択は子供の成長や人格形成にいかなる影響を与えるのでしょうか。といった問いから、移民研究の中身を想像して頂けると幸甚です。

家庭は、家族というメンバーと、メンバーが集まる物理的な「場」を包含する概念として説明されることが一般的ですが、わたし自身は、先に触れたように、そこにルーツという要素を強く感じます。そして、わたしのような移民研究者には、移動や移住という行為を人間社会の基本属性として捉える癖があります。人類史において定住は最近のこと、国境が作られたのはもっと最近のこと。人間は、生まれ育ち、学び、働き、老後の人生を送り、現世を去る。このライフサイクルで、わたしたちは、いったいどれほどの移動を繰り返すのでしょうか。そしてこの移動がルーツを結び、広げます。私事で大変恐縮ですが、わたしの父母はそれぞれ北海道と島根の出身、妻は山口生まれ佐賀育ちで、神奈川を出自とするわたしが出会ったのは茨城です。申し上げたいのは、家庭のルーツは、今ここに集う家族の歴史と地理を通じて互いの固有の成り立ちを知り合う、生きた材料であるということです。

ルーツ探しには、救いの効用もあります。わたしは職業柄、アイデンティティの揺らぎや喪失に悩む移民の若者が祖国にルーツ探しの旅に出て自己の回復をはかるという話をよく耳にします。帰属の曖昧さに追い立てられるその行為に、ルーツをルーツたらしめる人間の本性を感じます。もちろんルーツ探しは、冒頭に言及した「親ガチャ」に象徴される現代の格差への対抗手段ではありません。家庭によってはルーツが秘匿され、人によっては自身のそれを開示できない事情があります。しかしいずれにしても、家庭には、ルーツを違える人間が偶然か必然かめぐり逢い、多かれ少なかれ摩擦を起こし、離合集散を繰り返し、共存をはかろうとする、一概にはいえませんが、そんなダイナミズムを内在しています。それは学びにも喜びにも救いにも諦めにもなり、時には絶望にも。教育の生々しい素材が、家庭には凝縮しているといえるでしょう。ルーツという観点から、家庭を考えてみました。

家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会・講演

『家庭教育を支援する上で大切にしたい点』



大阪成蹊大学教育学部 教授

吹田市子育て青少年拠点夢つながり未来館 参与

山本 智也 氏

(家族心理士)

「問題は『核家族の孤立化』なのです」。山本氏の声が響いた。この問題提起に沿って、「家庭教育を支援する上で大切にしたいこと」についての講演がなされた。

山本氏は、肩書からも推察されるように大阪で生まれ、十年超に及び家庭裁判所調査官として奉職されたのちに、現在の職業に就かれている。その間、変わりゆく家族の姿を見続けてきた。

そこで感じたのは、核家族化が問題なのではなく、むしろ「核家族の孤立化」が問題ではないかということだった。子育てに不安を感じても近隣に血縁者が存在しない。或いは存在していても関係がよくないため、相談相手がいらない。このような状況が、子育ての負

担感や不安感につながっているのではないかとみており、「核家族の社会的孤立」の現状を様々な統計や調査からわかりやすく説明してくれた。

このような現状から、今、必要なことは、すべての子育て家庭への支援と地域の子育て支援の充実であり、更には、子どもの貧困、ひとり親家庭への支援、児童虐待といった様々な課題をもつ家族への個別的な関わりであるとのことだった。

孤立した子育て家庭にとって「居場所」の存在は、とりわけ重要である。「ふらりと気軽に立ち寄れる」場所で、子育て仲間と何気ないお喋りをしたり、人と関わるのが何より必要だと山本氏は現在の状況を憂いながら

話していた。更にそこで大切なことは、「さりげないまなざし、さりげない関係性、ゆるやかな枠組み」の「場の構造」であるとのことだった。

最後に具体的な関わりについて、五項目からなる説明があった。①答えると応えるのちがいで②受容について③肯定的に受け止めることについて④共感的理解とは⑤カウンセリングマインドについて。それぞれの項目について具体例を交えながらの説明があ

り、参加者からの顔が見えるようだった。講演終了後、個別具体的な質問が相次いだことからそのことが窺えた。

今回の講演を通して、改めて私たち家庭教育に携わる者の在り方が問われている気がした。よかれと思ってしている支援が、「あつい支援」ではなく「あつ苦しい支援」になっていないだろうか。山本氏からの問いかけは、私の襟を正すのに十分だった。

（文責 二川早苗）

令和4年度日本家庭教育学会高橋賞の公募について

令和4年度日本家庭教育学会賞を下記の通り公募いたしますので、該当者を推薦される方（自薦でも他薦でも結構です）は申請をしてください。

記

1. 応募期間：令和4年4月18日～6月20日

2. 応募方法：所定の応募用紙にて応募する

（応募・推薦を考えている方は事務局までお知らせください。応募用紙をお送りします）

3. 応募資格：「日本家庭教育学会賞」規定第6条による（第6条は次の通り）。

〔（1）本学会の学会員であることを原則とする。

（2）常任理事の推薦により、常任理事会がとくに認めた場合には、学会員以外でも応募を認める場合がある。〕

4. 応募書類：「日本家庭教育学会賞」規定第7条（第7条は次の通り）。

〔応募者は、「応募用紙」、「（業績）添付資料」及び推薦者（会員）による「推薦理由書」（自己推薦理由書を含む）を提出しなければならない。〕

本賞の運営等はすべて「日本家庭教育学会賞」規定によりますので、詳しくは本学会HPにて同規定を参照してください。

なお、お問い合わせ等は本学会事務局までご連絡ください。

日本家庭教育学会事務局
(E-mail: jimu@hesoj.com)

日本家庭教育学会

令和4年度第37回大会のご案内

重要

新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては、大会の開催方法等が大幅に変更される場合がございます。開催に関して変更がある場合は、学会ホームページにてご案内いたします。ご参加のまえに、最新の情報をご確認くださいませよう、お願い申し上げます。

大会テーマ

家庭教育と健康

—コロナ禍の経験から何を学び、どう活かしていくべきか—

日 時 令和4年8月20日(土) 09:45～17:00

場 所 貞静学園短期大学

参加費(資料代) 1000円

主 旨

「新型コロナウイルス感染症」の拡大からすでに約2年半が過ぎました。世界に目をむけると、各国、いまだ感染自体は続いていても、終息を見越して日常を取り戻す方へ舵を切っています。以前の日常を取り戻し、経済活動、社会活動を停滞から脱していかなければ、社会全体が沈み込んでいくという危機意識もあるといえるでしょう。

多くの犠牲をはらったこのコロナ禍から早く脱して、忘れてしまいたいと思うのが自然でしょう。しかし、今回の災禍が続いている現時点で、このコロナ禍が私たちの社会に突き付けたものが何なのかを問うことは重要だといえます。

コロナ禍は様々な局面で私たちの社会のなかにある問題を浮き彫りにしました。たとえば、パンデミックへの対応の脆弱さ、格差の問題、経済的弱者の自殺の増加、人と人のつながりを断つ孤立化などがあげられます。コロナ禍によって可視化されたこれらの問題は今後の大きな課題だといえます。

一方で、コロナ禍によって人々の衛生への意識は大きく高まったともいえるでしょう。コロナ禍は社会全体に「健康」についての関心を増加させたといえます。コロナ禍が顕在化させたさまざまな社会的問題は、一見、個人や家庭における健康の問題とは離れた問題のように思えます。しかし、上にあげた問題群は個人や家庭のなかにダイレクトに関係しています。今回の大会では、この「健康」の問題を家庭教育との関連で専門家を招いて考えていきたいと思ひます。

プログラム

09:15	受付開始	
09:45	開会式	
10:00	個人研究発表	
12:00	昼食・休憩	(※常任理事会)
13:30	講演・ディスカッション	※講演の詳細は学会ホームページにて
16:00	閉会式・会員総会	お知らせします。

令和 4 年度第 37 回大会個人研究発表者募集

- 【応募資格】 日本家庭教育学会の正会員
*『家庭教育研究』への投稿を予定される方は積極的に大会発表を申し込んでください。
- 【日時・場所】 令和 4 年 8 月 20 日（土）、貞静学園短期大学
※感染症の拡大状況により開催方法の変更がありえます。変更の場合は 7 月中旬ごろまでに学会 HP にてお知らせします。
- 【発表時間】 発表時間は 20 分、質疑 10 分とします。
- 【発表申込】 発表をご希望の方は、テーマ及び氏名・所属・住所・電話番号を明記の上、
令和 4 年 6 月 30 日までに下記の連絡先までお申込みください。
- 【原稿提出】 発表原稿の提出締め切りは、令和 4 年 7 月 20 日です。なお、応募多数の場合には、大会準備委員会で選考させていただきます。申請者には発表用のフォーマットをお送りします。
（発表原稿とは別に 300 ～ 400 字程度の要旨も提出してください）
- 【問合せ先】 研究発表をご希望の方は、本学会事務局までメールにてお申し込みください。

日本家庭教育学会事務局
〒102-8561 東京都千代田区紀尾井町 4-5（一社）倫理研究所内
E-mail : jimu@hesoj.com

『家庭教育研究』第 28 号 原稿募集

日本家庭教育学会の会員は学会誌『家庭教育研究』に投稿することができます。『家庭教育研究』第 28 号（2023 年 3 月発行予定）のための原稿を募集しますので、奮ってご応募ください。投稿される方は、「『家庭教育研究』寄稿規定」（当学会サイト <http://hesoj.com/> に掲載）に従って執筆し、完全原稿を下記の宛先に送付してください。締切は、**2022 年 9 月 30 日（金）（必着）**です。

- ・原稿の内容は、家庭教育に関するもので、他学会誌・研究会誌等に未発表のものとしします。家庭教育に関する実践報告も掲載の対象となります。
- ・〔寄稿規定 6〕において、「投稿者は、原則として投稿に先立ち本学会大会もしくは本学会主催の研究会等において口頭発表をおこなった者とする」となっておりますが、本規定は、投

稿者に研究内容を大会でご発表いただき、研究交流を促す趣旨で設けられたものです。本年 8 月の第 37 回大会で発表がない場合でも、以前の大会などで発表実績がある方は投稿が可能です。

- ・原稿は、原則として MS-Word で作成してください。
 - ・原稿の提出方法は、①郵送、または②メール添付となります。
 - ① プリントアウトした原稿 1 部と Word ファイルを保存した USB メモリ等を下記宛先に送付してください。
 - ② Word ファイル及び PDF 化した原稿をメールに添付し、必ず下記の学会誌専用アドレス宛に提出してください。ファイル容量の関係などで送信できていない場合に備えて、提出後は同下記アドレスに送信した旨、別途メールを送信してください。事務局から折り返し、受領の確認メールをお送りします。事務局からの受領確認メールがない場合は投稿が完了していないことになりますのでご注意ください。
 - ・原稿の採否については、審査のうえ、学会誌編集委員会が決定し、2022 年 12 月下旬までに投稿者に通知します。
 - ・『家庭教育研究』第 28 号に掲載された論文・研究ノート・実践報告は、電子形態にして本学会ウェブサイトが全文が公開されます。
- ※投稿に際しては「『家庭教育研究』寄稿規定」をよくお読みいただき、ご不明な点は下記までお問い合わせください。

原稿送付・問合せ先：日本家庭教育学会事務局

〒102-8561 東京都千代田区紀尾井町 4-5（一社）倫理研究所内

Email: journal@hesoj.com / tel. 03-3264-7430（火・金 10:00～16:00）

☆☆☆ 編集室から ☆☆☆

新年度を迎え、ご自身或いはご家族が、新しい環境になられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。長ずるにつれ、記憶のテーブルがいっぱいになり、新しい扉が重く感じるようになってきました。でも、思い切って押ししてみると案外、扉の向こうには女神が微笑んでいるものです。今年の夏の大会も、ハイブリッドでお会いしましょう。

（二川早苗）

会 報 第109号

2022 年 4 月 30 日発行

日本家庭教育学会

会長 中田 雅敏

THE HOME EDUCATION SOCIETY OF JAPAN

事務局：〒102-8561 東京都千代田区紀尾井町4-5

（一社）倫理研究所内

日本家庭教育学会事務局

TEL & FAX 03-3264-7430

郵便振替口座 00150-9-95821

メールアドレス jimu@hesoj.com